

汚濁が始まった堀川

下水道整備……町はきれいに、堀川・新堀川は悪臭と汚濁の川に

下水道は雨水をすみやかに排出して浸水被害を軽減する。また、ドブがなくなることで蚊やハエの発生や伝染病の蔓延を減らすことができ、人々が密集して生活する近代都市には、なくてはならない設備だ。

名古屋では明治44年から下水道の建設が始まり、大正12年に旧市街地のほとんどの区域をカバーする「下水道創設事業」が完了した。

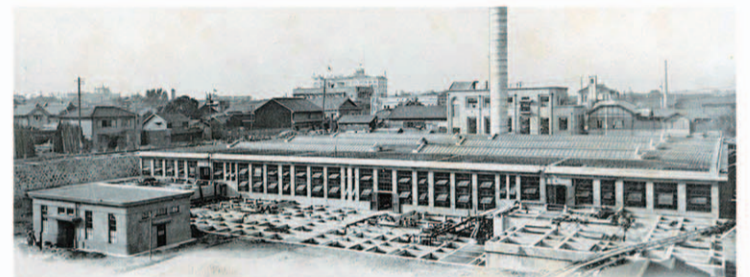
名古屋は雨水と汚水を一つの管で流す合流式を採用し、放流先は堀川と新堀川であった。この頃の下水道は、汚水を処理せずにそのまま川へ放流する方式である。

尿尿のほとんどは汲み取られ、川へ放流される下水は生活雑排水や工場排水であったが、12年頃になると、放流先の堀川・新堀川は悪臭と汚物の浮遊で周辺の住民から苦情が出るようになった。下水道の整備により街の中は衛生的で快適な暮らしができるようになったものの、そのしわ寄せがすべて堀川・新堀川にきたのだ。

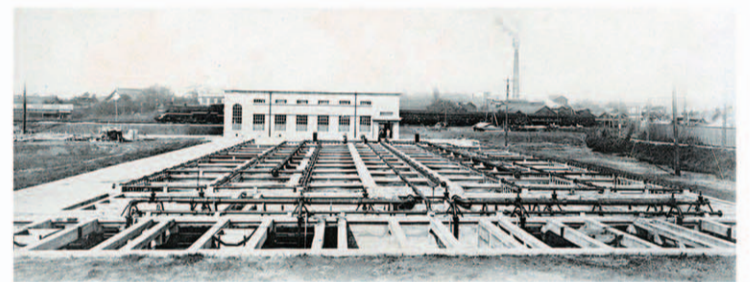
下水処分場の建設

堀川などに流れ込む汚水の浄化が大きな課題になってきた。

大正初期にアメリカやイギリスで活性汚泥法による下水処理が実用化されていた。しかし気候など環境が異なる日本でも可能かどうか懸念されており、名古屋市は全国に先駆けて大正13年から処理実験を行い活性汚泥の生成に成功している。これをふまえて下水処理場の建設計画がたてられ、昭和3年に処理場の建設が始まり、5年に完成して処理を開始した。6年3月にはポンプ所などもすべて完成し、堀川の東側の旧市街地で発生する汚水は浄化して放流されるようになった。



堀留下水処分場



熱田下水処分場

河川浄化の取り組みが始まる

最新の活性汚泥法による下水処理場を整備したものの、十分な浄化はできなかった。

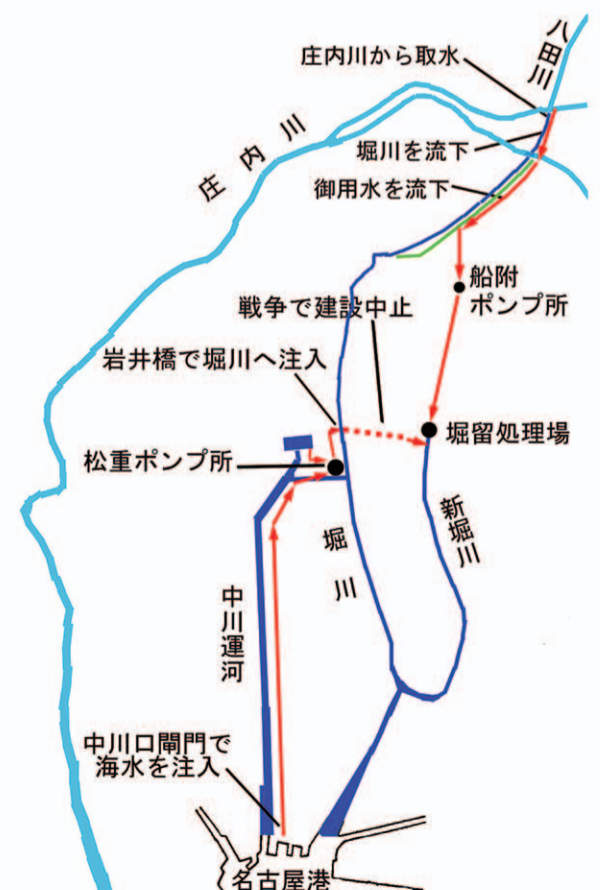
水質を表す指標の一つにBOD(単位mg/l)があるが、昭和7年のBODは、堀川が35、新堀川が50、中川運河が40であった。堀留・熱田下水処理場が稼働しても、川はドブという状態であった。

新堀川の水質改善のため、庄内川の水を注入する事業が始まった。昭和6年に船附ポンプ所が造られ、翌年から庄内川の水を、猿投橋付近から暗渠で船附ポンプ所へ引き入れ、そこから東片端・東新町・丸田町を經由し堀留処理場で新堀川へ注入するようになった。

さらに改善するため、堀川・新堀川・中川運河を合わせて浄化する「三川浄化計画」がつけられた。

12年に松重ポンプ所が完成して、当面の方策として中川運河の水を堀川へ放流し始めた。これにより松重閘門から下流の堀川は非常にきれいになってきた。翌年にはポンプ所から岩井橋の下流まで右岸に導水管が造られ、岩井橋下流でも堀川へ放流されるようになった。

計画では、引き続き岩井橋から新堀川の記念橋まで導水管を造り、中川運河の水を新堀川へ注入することになっていたが、日中戦争の激化により事業は一時中止、15年に工事は打ち切りとなった。



浄化用水の送水経路